

後期中等教育における翻訳と表現をめぐる教育プログラムの開発

— 高大連携をねらいとする国語科と英語科の双領域を横断する新たな教育活動を目指して —

林 圭 介 (法政大学中学・高等学校)

1. 序論

本稿のねらいは、後期中等教育で翻訳を組み込んだ教育活動がどのように実践できるかを考察することである。ミカエル・ウスティノフ(2008)によれば、翻訳とは「二つの言語＝文化間の断続的往復の作業」であり、「あらゆる社会に内在する自文化中心主義的傾向に修正をかける最も有効な手段のひとつ」である。つまり、翻訳とは異なる言語と文化の間を切り結び、自他の文化の関係をつねに問い直しつづけていくきわめて批評的な言語実践なのである。

本稿では、翻訳を日本の教育活動の中に位置づけ、実践するための方法を提起する。日本の中等教育では英語教育の中で英文和訳や和文英訳という形で実践されてきたが、翻訳は異なる言語と文化の双方を対象にしている。その意味で、英語教育と国語教育の双方で取り組まなくてはならない言語活動である。翻訳が双方の言語を結ぶ教育活動として実践されれば、一つの言語からだけでは気づきえなかった文化の多様性と自己を表現する力を身につけることができるようになる。本稿では、翻訳を取り入れたタスクから英語教育と連携する国語教育のあり方を検証し、後期中等教育においていかに翻訳と表現をめぐる教育プログラムが実践できるか、その可能性を追究したい⁽¹⁾。

2. 研究対象と方法

勤務校では、中1・中2を学習習慣の確立を図るファーストステップとし、次の中3・高1を主体的な学びを追究するセカンドステップと位置づけている。高1までの基礎力養成プログラムを経て、高2・高3では高度教育プログラムとして共通授業と選択授業からなる授業を選び、入門から発展までの内容を身につける教育システムを設けている。本稿で述べる教育実践はこうした勤務校独自の教育システムの中で行ったプログラムである。中高大をつなぎ、異なる言語を結び、海外の教育関係機関とも連携する教育プログラムを以下に提起したい。

2-1. 「絵本の方法」(中3)

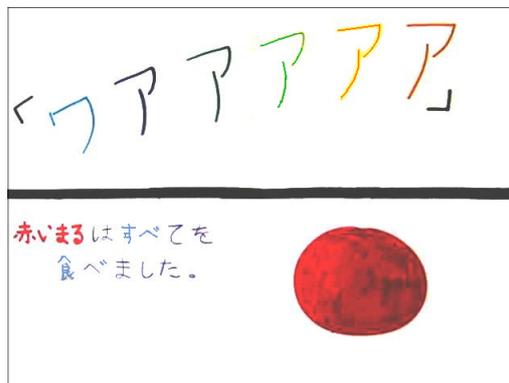
プログラムの入口に位置づけたのは、中3の「絵本の方法」である。絵本を学習者がはじめて体験する文学ととらえ、絵本の翻訳と絵本づくりを実践に組み込んだ。教材として取り上げたのは、*The missing piece* (Silverstein 1976) と『点と線』絵本(長谷川集平 1988)である。

*The missing piece*はゲームのパックマンのような欠けた丸の主人公がかげらを探す旅に出る物語である。興味深いのは、タイトルの訳し方だ。倉橋由美子訳では、行方不明のかげらを「ぼくを探しに」と訳し、“it”をそれではなく「ぼく」と置き換えている。本文の訳からもわかるように、“it”が「ぼく」となり、「足りないかけらを探しに行く」物語として、本当の「ぼく」を探し出そうとする成長の物語が読み込まれているのだ。

こうした翻訳による物語の書き換えを『点と線』絵本の創作に活かした。『点と線』絵本とは、点と線のつながりから物語絵本を創作する、絵本作家長谷川集平が提起した絵本づくりの方法である⁽²⁾。学習者が創作した『点と線』絵本には、*The missing piece*の翻訳のように主人公の変化や成長を読み取ることができる。たとえば、「点と線」を描いた16枚のカードを組み合わせて書かれた物語は次のような作品である。

赤い○

赤のまるはむこうがわにきました。
 「何をしようか。」赤のまるは話しました。
 赤いまるは山にのぼりました。
 でも、風がつよかったです。
 「つぎは何をしようか。」赤いまるは話しました。
 まちへ行きました。
 でも、まちはかじになりました。
 赤のまるは火の中にとじこめられてしまいました。
 まちはもうありませんでした。
「おなかですいた。」
赤いまるは話しました。
「ワアアアア」
赤いまるはすべてを食べました。
 もう何もありません。



(傍線は引用者による。以下同様。)

「赤いまる」は山へ登り町へ行くが、そこでは風や火事が自分を阻む。「赤いまる」が自分を取り戻すのは食べることに於いてである。「もう何もありません」という結末の言葉は、すべてがなくなったむなしさを伝える一方で、「おなかですいた」とつぶやく「赤いまる」がはじめて自分ですべてができた行動の結果を表してもいる。

授業の最後にとった感想には、「絵を描くものだと思っていたが、実際は点と線」だけで「なんの意味もないものから物語を作るのはとても大変だった」と書いている。今回の絵本づくりが学習者の「想像力」を大いに試す授業であったことがうかがえる。その意味で、「絵本の方法」は、点や丸、そして線といった単なる記号に、学習者がそれぞれの想像力と言葉で「私」を語る表現を学ぶのである。

2-2. 「機械翻訳の方法」(高1)

高1で取り組んだのは、「機械翻訳の方法」である。「機械翻訳の方法」で扱ったのは、*Kafka on the Shore* (MURAKAMI Haruki 2005) と「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」(村上春樹 2005) で、「Yahoo! Japan 翻訳」という翻訳ソフトを活用した。「Yahoo! Japan 翻訳」は、「英・中・韓・日4か国語に対応。文章、ウェブページ、Yahoo!検索を翻訳」という無料翻訳ソフトである⁽³⁾。共同研究スタッフの松村香奈(法政大学中学高等学校・英語科教員)によれば、高校生による翻訳実践のためのツールとして機械翻訳を取り上げることは、異なる言語に対する気づきを学びの場にもたらす⁽⁴⁾。「機械翻訳の方法」では、この異なる言語に対する気づきを重視し、ツールとしての翻訳ソフトの特性を学びながら、これまでの自分とは異なる視点と言語で、学習者自身について表現する方法を身につけることをねらいとした。

Kafka on the Shore では、冒頭部分の一節を翻訳ソフトを使って英語から日本語に翻訳した。翻訳ソフトは非定型の文章を翻訳するのが苦手なため、その訳文はおよそ意味不明だった。たとえば、次のような一節である。

My fifteenth birthday is the ideal point to run away from home. Any earlier and it'd be too soon.
Any later and I would have missed my chance.

私の15回目の誕生日は、家から逃げる理想点です。それ以前とそれがあまりにすぐにある何でも。後の何でもと私は、私のチャンスを見逃した。

この一節が訳しにくいのは、「if」を省略した仮定法が使われているためである。対象学年である高校1年生にとって仮定法は未習の文法事項である。この一節の場合、日本語の文章として訳し直していく手だては「Any earlier and」と「Any later and」にある。この対句仕立ての表現に対する気づきをもたらすのが翻訳ソフトによる生半可な訳文である。たとえば、「私の15回目の誕生日は、家から出る理想点。それより前

はあまりに早く、それより後ではチャンスを逃す」というように、英語の原文に書かれている表現への気づきが翻訳に際して大切な作業となることが見えてくる。こうした訳例をみると、翻訳には単語や文法の理解が不可欠であることがわかる。と同時に、いかに翻訳ソフトを翻訳実践に活用していくことができるかもわかるのだ。

翻訳の後、村上の小説を参考に「七月のある晴れた朝に100パーセントの恋人に出会った」と想定して、英語しか理解できない相手に詩を書く実践を行った。作品の主題である「100パーセントの相手との運命の出会い」を学習者は次のように表現している。

もしここで別れていつかまたどこかで出会えたら、その時はずっと側にいさせてちょうだい。

「Yahoo! Japan 翻訳」で「原文」に日本語文を挿入すると、「訳文」には "I part here, and I let you be in the side all the time then, and give you it sometime if, in addition, I can meet you somewhere."と意味不明な訳文が出てくる。この「訳文」を「原文」に挿入し、どのように訳せるかを確認すると「私はここで別れます、そして、私はあなたをそれから常に側にいるようにして、そのうえ、いつか、私があなたにどこかで会うことができるならば、あなたにそれを与えます」となる。

こうした作業から見えてくるのは、単に機械翻訳において誤訳の傾向があることではない。機械翻訳を活用しながら、学習者がいかに異なる言語を往復し、自らの表現としていくことができるかがさらに重要な点だ。*Kafka on the Shore*の一節にあった"if"を用いながら、学習者は機械翻訳を活用して次の英文を「訳文」に選んでいる。

If we say good bye here and can meet somewhere again sometime, let me be by the side all the time.

この「訳文」をふたたび「原文」に挿入すると、日本語の「訳文」では「我々が良いさよならをここで言って、いつか再びどこかで会うことができるならば、常に側によってほっといて。」となる。「良いさよなら」や「ほっといて」にはもちろん修正が必要だが、はじめの日本語の表現にかなり近づいていることがわかるだろう。作品の主題に結びつくキーワードや表現を取り入れながら、学習者は英語と日本語の2つの言語で表現する方法を翻訳ソフトを主体的に活用して身につけることができるのである。

2-3. 「詩の方法」(高2)

高2で取り組んだのは、「詩の方法」である。「詩の方法」では、日本で国語を学ぶ生徒が海外で日本語を学ぶ学生の教え手となり、国語の授業から日本語を学ぶ意義をつかみとることをねらいとした、共同研究スタッフの白川理恵(トロント大学東アジア言語学部・講師)と協働で行った実践だ。扱ったのは、「わたしと小鳥とすずと」(金子みすゞ 1998)である。まずカナダの学生と日本の生徒の双方で「わたしと小鳥とすずと」をもとに日本語で詩を書いた。次に学生の詩から共感できる詩を2つ選び、手紙という形式でその詩を生徒が添削し、コメントを加えた⁽⁵⁾。

カナダの学生が創作したのは次のような詩である。

少しはいい
塩は料理には必要なのに、
少し入れれば、美味しくなるが、
たくさんはまずい。

雨は農業には必要なのに、
少し降って、成長できるが、
たくさんは災難だ。

薬は病気には必要なのに、
少し飲んで、治られるが、
たくさんは毒薬だ。

愛は人生には必要なのに、

わたしと小鳥とすずと
金子みすゞ

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう、
地面をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう、
たくさんうたは知らないよ

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

少しあげて、少しもらって、
永遠になるかもしれないが、
たくさんは縛ることだ。

だから、いろいろな物、
やりすぎるはいけなくて、
少しだけいい。

「すず」や「小鳥」や「わたし」といった金子の詩にある単語が用いられていなくても、「なのに」や「が」のような逆接を用いた文法構造や、「料理」「農業」「病気」「人生」に必要な「物」の意味を「少しはいい」というテーマに結びつけた詩の世界の設定が学習者と金子（1998）の想像力を結びつけている。日本の生徒による手紙の一節を紹介しよう。

次に「少しはいい」の詩についてです。塩、雨、薬、愛で例えたところが分かりやすくすごくいいと思いました。ものごとには加減が本当に必要なんだな、と改めて気付かせてくれました。そこで、こうした方がもっとよくなる点があったので書きます。「少し入れて」や「少し降って」等の仮定を言うところでは「少し入れれば」や「少し降れば」のようにした方が文の繋がりがより一層よくなると思います。

日本の生徒が添削したのは、第1連・2連・3連の「入れて」「降って」「飲んで」を「入れれば」「降れば」「飲めば」と仮定形に直したり、「やりすぎるはいけなくて、少しだけいい」を「やりすぎてはいけなくて、少しだけがいい」というように「は」を名詞句で受け、タイトルの「少しはいい」と呼応するように「少しだけいい」に「が」を挿入してテーマを強調したりするといった点だった。日本の生徒にとっては、外国語として日本語を学ぶ学生から日本語による表現のあり方をあらためて学び直す体験となったのである。

日本語を母語と第2言語としてそれぞれ学ぶ学習者同士の交流は、金子の詩の世界をどのように自らの表現としていけるかを示している。翻訳の方法をもとにした詩の創作と添削、そして、手紙のやり取りから見えてくるのは国語教育と日本語教育によるコラボレーションの可能性である。詩の世界の翻訳と創作をめぐって相互に読み書きする交流の場を構築することによって、翻訳における想像力を学習者は身につけることができるようになる。

2-4. 「村上春樹の方法」(高3)

プログラムの出口として高3で行ったのは、「村上春樹の方法」である⁶⁾。「村上春樹の方法」では、村上の翻訳論と創作観を学び、学習者が文学作品を自ら翻訳し、創作する方法を身につけた。取り上げたのは、*Popular Mechanics* (Raymond Carver 1989) と機械翻訳の方法でも取り上げた「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」(村上 2005) である。

村上(1993)によれば、「高校生の英作文程度の稚拙な文章」や「本当に基礎的なシンプルな語彙」だけでも「文章が書けるんだ」という。「シンプル」な言葉や文章が「シンプル」ではない「現実」を生み出す。その逆説こそ翻訳と創作を結ぶ村上春樹の方法である。この村上の方法から *Popular Mechanics* をリレー翻訳し、「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」の続きを共作小説として創作した。

リレー翻訳とは、小説を任意の小節に分け、それぞれを教室の学習者で訳し、つなぎあわせて翻訳する試みである。小説の全体はあらかじめ示さず、学習者は任意の小節だけを訳すこととした。その結果、タイトルの *Popular Mechanics* は「人気のある機械工」と訳された。しかし、訳し終えた後で任意の小節をはじめから順に並べ読み合わせたとき、単なる英文和訳は他の文脈の元に置き直された。*Popular Mechanics* は、赤ん坊をめぐる夫婦が喧嘩別れする様子が描かれた物語なのだが、学習者が訳し直したタイトルは「よくある出来事」だった。なお、村上春樹の訳は「日常の力学」である。リレー翻訳の醍醐味は、文脈を再編しながら、原文を新たに意味づけ、書き直していく点にある。そこに単なる英文和訳とは異なる翻訳の意義がある。

また、共作小説とは前半部分を日本語、後半部分を英語に組み替えて村上春樹と学習者が共に小説を書

く試みである。前半部分では、運命の相手とすれ違う悲しみが描かれ、今ならその相手にどんな風に話しかけるべきかを知っていると、後半部分でその科白が語られている。「その科白は「昔々」で始まり、「悲しい話だと思いませんか」で終わる」。学習者が創作したのは、その後半の「科白」である。リレー翻訳で学んだように、日本語と英語のそれぞれの文脈を手がかりに創作した。それが翻訳と創作を結ぶ村上の方法を学習者自身の表現とするための方法論である。

たとえば、『喩え歌』とタイトルがつけられた学習者の創作は、次のような「科白」である。

昔々、ある独りの男がいました。もちろん彼には親も友達もいました。大事なことを教えてくれた恩師や、無二の親友と呼べる大切な人もいました。しかし、それでも彼は独りでした。それは彼が「自分が生まれる前、世界はなかった。そして自分が死んだ後は、世界はなかったことになるんだ。つまり自分が存在するからすべてが存在するのであって、すべては自分であるのだ」と考えていたからです。彼にしてみれば他人は、自分の中にあるもので、彼無しではあることすらないものであったのです。そんな他人の中のある女を、彼は好いていました。しかし、彼は女に声をかけることをしませんでした。それはそうです。彼は、その女もまた自分であり、好きであるのは当たり前だと思っていたからです。悲しい話だと思いませんか。

『喩え歌』では、「独りの男」の世界に対する認識が語られている。それは、村上春樹の小説で彼女に語りかけることができなかつた「僕」に対する批評だといえる。「我々」が「すれ違うに至った運命の経緯のようなものを解き明か」せば、見えてくるのは「自分」という殻に閉じこもり「独り」だと考える「男」の「悲しい話」なのだから。『喩え歌』は村上の小説の続きを語り継ぐ中で小説そのものを批評する物語となっているのである。

日本語と英語という異言語を媒介する翻訳を教育の場で実践していくことには、読むことと書くこととの関係を新たに更新していく可能性がある。それは、翻訳学の理論を応用した後期中等教育における具体的な教育実践と位置づけられるだろう⁽⁷⁾。学習者が取り組んだリレー翻訳と共作小説は、教室空間で学習者がそれぞれに、そして、共に物語を発見するための読み書き訳すレッスンなのである。

3. 結論

これら4つの実践から浮かび上がってくるのは、翻訳とは単なる異言語による同じ意味の置き換えではなく、新たな価値を表現する創造的な書き直しと捉えられることである。ジェレミー・マンデイ(2009)が指摘したように、翻訳学は「テキストとしての翻訳」から「文化と政治としての翻訳」へ大きく「文化的転回」した。テキストとしての翻訳は「正確性」という翻訳についての評価に着目したが、文化としての翻訳はコンテキストに潜む「イデオロギー」を炙り出した。翻訳におけるコンテキストの重視は原文に隠された「イデオロギー」を見えるようにし、翻訳において透明な存在だった翻訳者を可視化したのである⁽⁸⁾。

本稿で提起したのは、翻訳学が切り拓いた地平をもとに学習者が異なる言語と文化を媒介する翻訳者になる方法である。それは、翻訳によって可視化された翻訳者のように、翻訳を組み込んだタスクによって学習者を可視化する試みである。翻訳学における「文化的転回」を理論的な根拠として、学習者が自ら想像力を身につけ自己を表現していく翻訳プログラムを実践したのである。序論で述べたように、勤務校は大学入試をほぼ必要としない特殊な教育システムを採っているが、本プログラムが教育の場に提起する大きな価値は、翻訳を組み込んだタスクから学習者が教室で個々に学びの体験を共に身につけていく点にある。

今後の課題は、翻訳プログラムを国語科と英語科の双方のカリキュラムの中に位置づけ、系統的かつ効果的に実践していくことである。中高大付属校間および海外日本語教育機関との連携を通じて、本稿で述べた「後期中等教育における翻訳と表現をめぐる教育プログラムの構築」を複数の言語を結ぶ翻訳教育カリキュラムとして創出したい。

脚注

- (1) タスクとは、英語教育学者の高島英幸(2005)が提唱する、習得したい言語を用いて理解・表出させたり情報交換などを行なわせる課題のことである。与えられた課題を自ら解決し、学習者は効果的に言語を学習することができるようになる。
- 具体的な実践例として、小学校における英語教育の教材として絵本を題材とした「絵本型」プロジェクトを提唱した東野裕子・高島英幸(2007)がある。これは、絵本の表現を言語材料として、登場人物を変える、話の続きを作るなどの創作活動や劇などを用いた表現活動である。高島らが挙げる「絵本型」プロジェクトを応用したのが、「2-1. 「はじめての文学としての絵本」(中3)」で論じた実践である。
- (2) 三森ゆりか(2002)は、絵本をテキストとして「絵の分析」から「テキストの分析」に至る言語教育の方法を提唱している。「はじめての文学」は、三森が挙げる「複眼的思考力」を身につけるための具体的な手だてを絵本の翻訳と創作という2つのタスクから探っている。
- (3) 詳しくは、<http://honyaku.yahoo.co.jp/>を参照されたい。
- (4) 松村香奈「第3回 翻訳と表現をめぐる共同研究 2009年度高校1年夏期特別講座実践報告」(2009年8月)での指摘による。詳しくは松村(2010)を参照されたい。
- (5) 日本語教育の分野において、英語教育との連携を論じた発表に佐藤幸恵・白川理恵(2009)がある。佐藤・白川は、語学能力の向上と異文化コミュニケーションに関する理解の促進を目的として、カナダと日本のそれぞれの学習者による言語活動から第2言語習得における対象言語と母語の関係を論じている。
- (6) 林圭介(2009)で、国語教育における翻訳の可能性を村上春樹の作品および学習者の翻訳と創作活動から分析した。翻訳学の理論を教育の場で実践していく試みと位置づけることができるだろう。
- (7) Susan Bassnett(1988)によれば、翻訳学は「科学的」と「創造性」という術語で区別された翻訳の実践と研究にまつわる古くからの二分法を切り崩すように展開してきたという。翻訳学は、理論と実践の間を行き来し、異なる言語と文化の間を接合する新たな学問分野である。
- (8) Basil Hatim(2001)は、翻訳学を「たくさんの部屋がある家」("Translation Studies as a house of many rooms")にたとえ、翻訳学における文化的転回によってイデオロギーに関する研究に焦点があてられるようになったと指摘している。すなわち、「翻訳のイデオロギー」と「イデオロギーの翻訳」を翻訳学における問題系の中心と捉えるのである。

参考文献

- 金子みすゞ(1998)「わたしと小鳥とすずと」『金子みすゞ童謡集』ハルキ文庫
- 三森ゆりか(2002)『絵本で育てる情報分析力』一声社
- 佐藤幸恵・白川理恵(2009)「ニュースレターを利用した日本語-英語相互学習の実践報告:カナダの日本語学習者と日本の高校生の連携から」『カナダ日本語教育振興会年次大会2009 研究発表要旨』
- 高島英幸(2005)『文法項目別英語のタスク活動とタスク 34の実践と評価』大修館書店
- 長谷川集平(1988)『絵本づくりトレーニング』筑摩書房
- 林圭介(2009)「第29回研究発表大会・発表要旨 村上春樹をめぐる冒険」『日本文学』第58号
- 東野裕子・高島英幸(2007)『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店
- 松村香奈(2010)「教科横断的視点から翻訳ソフトを用いた創作的翻訳と表現に関する授業研究」『法政大学中学高等学校研究紀要』第46号
- 村上春樹(1993)「台所のテーブルから生まれた小説」『村上春樹全作品 1979-1989①』講談社
- 村上春樹(2005)「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」『象の消滅』新潮社
- シェル・シルヴァスタイン(1979)『ぼくを探しに』倉橋由美子訳、講談社
- ジェレミー・マンデイ(2009)『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳、みすゞ書房
- ミカエル・ウスティノフ(2008)『翻訳-その歴史・理論・展望』服部雄一郎訳、白水社
- ロマン・ヤコブソン(1973)『一般言語学』川本茂雄監修、みすゞ書房
- Bassnett, Susan. (1988), *Translation Studies*. Routledge.
- Carver, Raymond. (1989), Popular Mechanics, In *What We Talk About When We Talk About Love*. Vintage.
- Hatim, Basil. (2001), *Teaching and Researching Translation*. Pearson Education.
- MURAKAMI Haruki. (2005), *Kafka on the Shore*. Translated by Gabriel, Philip. Vintage Books.
- Silverstein, Shel. (1976), *The Missing Piece*. Harpercollins Children Books.